

(随筆)

噫呼無情！「日本一」

か も と 生

由来千屋には「日本一」という形容詞をよく使っている。例えば旅館の割ばしの紙袋裏には「黒いものなら千屋までおいで、牛と炭なら日本一」という具合である。

私共は常にその文句を目や耳にしているうち、知らず知らずに別段それが異論を挿むべきものでもなく、当たり前かのように、いやむしろ誇らしくさえ思っていたのである。

というのも千屋の自然環境、それは中国山脈の嶺々に囲まれ、良くいえば山紫水明の仙境である。悪くいえば人里離れた辺境である。

こうした土地の産物は自然、山のもの、つまり用材と炭位なものが普通である。それに加えて伝統的遺産であるところの千屋牛がある。これも当地では山の産物に入れて良からう。年中殆んど半分以上は山で育ち、山で暮らしているのである。

この材産物、特に木炭と牛は千屋の山里にとっては僅かに生活を支え、又一応は商標が世間に知れている産物として誇りうる唯一のものであった。

こうした土地柄なるが故に先人は約40年前この土地を選んで種畜場を設けこの伝統的名産地に錦上花を添えるのくわだてを実現したのであろう。

私は当地に転勤するまで時たまここを訪ずれ、下の道から遥かに小高い山の上の建物を見上げる度毎に、何か由緒ある「城趾」を連想し今はそのかみ、古い物語りを秘めた「落漠たる古城」のなれの果かのような感じを抱いたものである。

そしてこうしたところに黙々として働いている人々に何か憐びんと敬意の織り交った気がしないで

もなかった。

この伝統と環境にマッチした古典的施設であるところの種畜場も時代の進歩と畜産振興のフットライトの余波を浴びて漸やく脱皮をする必要に迫られ、看板を和牛試験場に改めて生れ変らんとしたのである。

ここでまた「日本一」が殖えたわけである。何故ならば全国に「和牛試験場」は1ヶ所もないのである。いや恐らく世界中にない筈である。

こうなると威張ったものである。いふなれば千屋こそ「和牛のメッカ」だといっても知らない人はほんとうにしてくれる。

私はよく他所からの訪問者にこの土地を紹介し色々写真などを御覧にいれて話すタネに「この土地は牛の産地だけに牛は人権と同等の待遇をもっている。たとえば田や畑の作物を食い荒してもそれは荒された方が防ぎ柵をしていないのが悪いのであって牛は至るところ自由だとしている不文律がある。また公道上寝そべってバスや車の邪魔をしても無暗みに追い散らしけがでもさせたら大変なことになる。牛の方で自然に立退いてくれるようにする。それ程牛を大切に可愛がるのであって、それでこそ牛ができるのだ。こうしたところは日本牛にはない。まあ強いて探せば印度と千屋位のものだろう」

なんてことを自慢することになっているが、こんな土地柄ならばこそ和牛試験場も不似合な存在ではないと信じていた。

それがである。

先日ある県の種畜場長氏や係長一行がわざわざこの名所を訪問してくれた時である。

岡山畜産便り1959.03

場内をくまなく視察した挙句、無理に引きとめて一席晩さんを共にしたわけである。そのとき宿屋の箸で思い出した（例の日本一を）のか知らないが、「成る程日本一だなあ！こりゃ驚いた！」と盛んに感にたえたようなこと口走ってるので、さてはむべなるかな、どこがそんなに気に入ったんだろうかと心ひそかに次の文句を期待していたところ……

「これは確かに日本一だ、日本一お粗末な場だいや有難う、えらい参考になったわい、下には下があるもんだ。俺も全国30近くも場所を歩いてみたがこんなお粗末なものは初めてだった。まあ精々頑張るんだなあ！」と宣もうたのである。

言葉に衣を着せないいい方をし、何処でもズバスバいつてのけるので定評のある同氏のことだから遠慮会釈もあらばこそ、恐らく実感が自然に出たものと思う。又そこにはお互いに遠慮するような仲でもなく気にしたり腹を立てる程でもなければ、私は苦笑いをしてこの批判を酒と共にのみこんだ。

いやむしろ感謝の気持ちさえもって受入れたのである。大いに激励をしてくれたのである。

今時こんなミミッチイので針の穴から天のぞく式では看板に偽りがあるろうというものだ。もう少し気の利いた施設や内容に刷新しなけりゃ役に立たんじやないかという意味に私なりの善意の解釈をつけておく。

しかし我が同志の人々よ！唯一の「日本一」は砂上の楼閣の如く、ウタカタとなく消え去ったのである。夢は余りにも淡く暁の星の如くに去ったのである。

眼をみ張って広く見廻し、電波に耳を傾ければ間断なく世の中は動いているのだ。絶えず時代センスを逃がすことなく頭脳を働かして、高遠なる科学への道へ精進しなくてはならない。

「日本一」に酔うていたことは恰かもドブロクの二日酔のようなモチの良さだけに止り、それにたん溺し

ていてはそれこそ鈍重なる代物となり、場自体も落漠たる城趾への道を辿ることになるだろう。

「夢よ一度」と崩れさったものに想を走らせて今私共同志は微力を捧げているつもりである。そして何日の日か「日本一お粗末」の汚名を返上して再び立派な「日本一」への憧れを抱き、たゆみなく牛歩を続けているのである。

切に皆さんの御声援を乞う次第である。

1959・2・20